

目次

1. 事務局より
2. 前年度編集責任者より
3. 新編集委員より
4. 本年度編集責任者より
5. 運営・企画担当より
6. 例会予定
7. 談話会予定
8. 研究促進プログラムについて
9. 各地の研究会だより
10. メーリングリスト frenchling からのお知らせ
 11. 収支決算報告
 12. 編集後記

1. 事務局より

事務局が青山学院大学フランス文学科合同研究室内に置かれるようになって三年目に入ります。昨年度は、Dhorne が在外研究で一年間パリに滞在していた関係で、東京とパリの2カ所で事務を行っていました。インターネットのおかげで、原則として、メールの対応はできる限りパリで行い、会計などの事務処理は鳥居が東京で行うという体制をとることができましたが、会員の皆様にはご迷惑をおかけしたかもしれません。お詫び申し上げます。2014年度から、以前の事務局体制に戻りますので、どうぞよろしく願いいたします。

連絡先は、以下の通りです。

〒150 - 8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25
 青山学院大学フランス文学科合同研究室内
 日本フランス語学会事務局
 e-mail : belf-bureau@cl.aoyama.ac.jp

◆会費と入会

会費の徴収は基本的に郵便振替で行っています。会費は『フランス語学研究』に同封する振り込み用紙で速やかに払っていただくようお願いいたします。3年以上の会費の納入が滞っている場合は会員資格が停止され、『フランス語学研究』は送付されなくなりますのでご注意ください。

入会の申し込みまたは事務局へのお問い合わせ

せは上記のメールアドレスにお申し出ください。

◆研究発表と原稿の投稿

本学会においては、原則として、会員でなければ、研究発表も原稿の投稿もできません。このことを知らない学生がたまにいます。去年もそのようなケースがありました。先生方におかれましては、指導されている学生が本学会で発表したいという場合、学生が会員であるかどうか確かめてください。入会していなければ、入会を勧めてくださいますようお願いいたします。

『フランス語学研究』に原稿の投稿を希望される方は、できるだけ早くその旨を事務局までお知らせください。そのうえで、11月末日までに原稿を事務局宛に送るようお願いいたします。詳細については『フランス語学研究』の表紙裏に記載されている「投稿規程」を参照してください。

◆学会誌のアーカイブ化について

本学会でも学会誌『フランス語学研究』のバックナンバーを電子アーカイブ化し一般公開する運びになったことは本ニューズレターの20号でお知らせしたところですが、現時点では1号から2008年刊行の42号まで公開されています(国立情報学研究所Niiが提供している論文情報ナビゲータCiNiiからアクセスできます)。本来なら、直近の3年分を除く43号、44号および44号別冊まですでに公開されていてしかるべきところなのですが、事務局からの手配の遅れに本サービスの提供元(国立情報学研究所電子図書館)での登録作業の滞りが重なって公開が遅れています。利用されている会員の皆様にはご不便をお掛けして申し訳ありませんが、ご理解をいただければ幸いです。

本年度、どうぞよろしく願いいたします。

(France Dhorne)

2. 前年度編集責任者より

今回も無事に『フランス語学研究』を刊行できましたのは、会を支えてくださっている全会員のみなさま、原稿を投稿して下さった方々(もちろん残念ながら今回は掲載に至らなかった原稿の執筆者の方々も含みます)、原稿集め・査読・

校正等の作業を担ってくださった編集委員の方々、広告掲載で財政に余裕を与えてくださった諸出版社、印刷・製本を手がけてくださった印刷所など、多くの方々のご尽力によるものです。心から感謝いたしております。

編集責任者の仕事は、波状的に忙しい期間がやって来ますが、中でも特に忙しかったのは、3月上旬の第3回編集委員会の前と初校の出た3月末でした。前者は印刷所への入稿の準備と編集委員会の準備が重なっていますし、後者は多数の執筆者に一気に校正刷りと関連物を送らないといけません。これらには、前提となる日程があって、それに従って作業をするのでとても忙しくなります。

しかし、実は、現在の日程は昔のものを踏襲しているだけではないかと思われまます。以前は、春の学会時（フランス語フランス文学会）に語学会のスタンドを出して、そこで会費を徴収し『フランス語学研究』の最新号を手渡す、という形でやっていました。ですから、学会時に雑誌が出来ている必要がありました。一方、現在はすべて郵送になっているので、絶対的な期日というのはありません。むろん、だらだらと引っ張り過ぎては別のところで支障が生じるでしょうが、もう少し余裕のある日程にすることは可能なように思われます。特に、初校の出と印刷所戻しの間の日数は限界に近いものなので、あと数日でもあれば随分楽になるでしょう。

また、今回は、これまで3月の編集委員会の直後にみんなで行っていた「割り付け」を端折りました。これはぎりぎりまで迷ったので日程の緩和には役立ちませんでしたが、もし、最初から編集委後の「割り付け」は行わないとなれば、入稿準備に時間的余裕（自由）が生まれます。「割り付け」自体はもちろんやらざるを得ないのですが、それをみんなでやるかやらないか（あるいは特定事項のみに限ってみんなでシステムティックにやるとか）は、編集責任者が決めればいっだろーと思えます。

これで、私はお役御免になります。わずか1年間のことでしたが、みなさま方のご協力がなければ、ここまでたどり着くことは不可能だったと思います。あらためてお礼申し上げます。そして、最後になりましたが、いろいろとお教えくださった前責任者の石野さんに特段の謝意を、快く後任を引き受けてくださった新責任者の東郷さんに心からのエールを送りたいと思います。

*会員の林迪義さんが4月にお亡くなりになりました。たいへん議論好きで元気な方でした。林さんとの議論は刺激になりとても楽しいものでした。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(六鹿 豊)

3. 新編集委員より

◆芦野文武（慶應義塾大学）

2012年1月にパリ第7大学でフランス語の「相互性」に関する博士論文の審査を受け、2013年の2月末に帰国しました。指導教授は Denis Paillard 氏でした。J.-J. Franckel や S. De Vogüé などともに A.Culioli の発話述定操作理論を継承・発展させながら研究を進めている氏からは、言語理論それ自体よりも、言語研究の方法論について多くを学びました。「生の」データはそれ自体としては何も語らない。まずその生のデータに様々な操作 (manipulation) を加え、制約を炙り出し、何かを語りうるデータに「調理」すること。そこから一般化可能な仮説を構築し、制約を説明できるということによって仮説の妥当性を測る、という一連の手続きです。「なぜ発話はあるようにしてあるのか」を根本的な問いに据え、それに「説明」を試みようとするアプローチに魅力を感じます。博士論文完成までに6年以上の歳月を費やしましたが、滞在費の問題が深刻になった頃、幸運にも、2009年から2011年まではリール第3大学で、また2011年から2013年1月まではパリ第7大学で日本語を教える機会を得、日本語の面白さを(再)発見しました。研究に関しては、学部・大学院で指導してくださった川口順二先生の影響を受け、語の多義性に強い関心があります。現在は博士論文を出発点にし、フランス語の接頭辞の付いた動詞 (verbes préfixés) を、単純動詞と接頭辞のそれぞれの記述から出発し、両者から全体の意味が構築されるメカニズムを明らかにすることに取り組んでいます。どうぞよろしくお願ひします。

4. 本年度編集責任者より

次号49号は私、東郷雄二が編集責任を務めることになりました。実は私は二度目のお務めです。1999年の33号ですでに編集責任を経験しています。それまでは関東在住の編集委員の中から編集責任を選んでいたのですが、会務負担の分散化を図るため、関東以外からも編集責任を出すことになり、私はその第1号になりました。当時はまだ

インターネットと電子メールの利用がそれほど普及していなかったので、事務連絡の多くは固定電話を使い、文書は郵送していました。私が住んでいる区の中央郵便局がその少し前に自宅近くに移転して、土曜日曜でも郵便局を利用できるようになり、おおいに助かった記憶があります。

本学会がフランス語学研究会と称していた時代に刊行が始まった『フランス語学研究』がまもなく50号を迎えようとしていることを思うと感慨もひとしおです。しかし喜んでばかりはいられません。日本フランス語フランス文学会はかつて2,000人くらいの会員を擁していたのですが、今は約1,200人に減っているそうです。幸い本学会はそこまで会員数が減ってはいませんが、人口ボリュームの大きな団塊世代が定年を迎え、ポスト団塊世代もまもなく定年年齢にさしかかることを考えると会員数は確実に減るでしょう。そのことを考えておかななくてはなりません。また現在は青山学院大学に事務局を引き受けていただいておりますが、3年ごとに交替する規約になっていますが、大学の校務が昔に較べて忙しくなっているため、事務局の引き受け先を探すのが難しくなっています。今後の課題です。

本学会の編集委員を長く務めていただいた井元秀剛さん、喜田浩平さん、塩田明子さんが退任されました。長い間ご苦勞様でした。新任委員として芦野文武さんが加わることになりました。編集委員も少しずつ若返っていかなくてはなりません。

また本学会の編集委員をお務めいただいた林迪義さん（愛知県立大学名誉教授）が逝去なさいました。謹んでご冥福をお祈りします。

『フランス語学研究』はこれからも紙面の充実を図って行きたいと思っていますので、みなさまのご協力と投稿をお願いいたします。

（東郷雄二）

5. 運営・企画担当より

恥の多い生涯を送ってきた人間にとって、過去とは消去の対象でしかありません。消去の努力を怠ると、人間失格の烙印を自らに押すこととなります。しかし、今日だけは、人間失格にならない範囲で、昔のことを思い出す努力をしてみたいと思います。

世紀が変わってもまない2001年4月28日（土）、私は早稲田大学を訪れました。生涯で二度目の早稲田訪問でした。一度目は、まもなく世紀が変わ

ろうとする1999年の2月のことで、当時、週に2時間だけフランス語を教えていた予備校の企画で、バブル期さながらの入試応援に駆けつけたのでした。私が担当していた受験生はあえなく不合格となり、以後、その受験生は二度と口をきいてくれなくなりました。教師失格の烙印が押された瞬間でした。その10ヶ月後、私は予備校から戦力外通告を受けました。

それ以来避け続けていた早稲田大学を二度目に訪れたのは、日本フランス語学会の例会で発表するためでした。私にとって、学会発表は四度目、例会発表ははじめてのことでした。はじめてのことなのに私はなぜか自信満々で、企画・運営担当だった青木三郎先生（筑波大学）に数々の自分勝手な要求をしました。見事に天罰が下って発表はさんざんな結果に終わり、その発表をもとにして投稿した論文もほとんど相手にされることなく不採録となりました。研究者失格の烙印が押された瞬間でした。その例会のもう一人の発表者は、入試応援にともなかけつけた予備校時代の同僚でしたが、その同僚が我よりはるかに偉く見えました。これを機に私の研究は大スランプに陥り、私生活の絶不調にも見舞われ、2003年9月までの二年半、学会発表の舞台に立つことができずしてました。

これは実は私の記憶違いで、当時の記録をいま調べてみると、世紀末の2000年に何度か、例会参加のために早稲田大学に足を運んでいることが分かりました。2001年4月28日（土）は、私にとって二度目の早稲田訪問ではなかったのです。私の脳が入試応援と例会発表の記憶を消去しようと奮闘するあまり、デカルトの悪霊が私の記憶を改竄し、かえってその二つの記憶だけをうっすらと残してしまっただけなのでしょう。それと、入試応援は本部キャンパス、例会発表は戸山キャンパスだったようですが、それもよく覚えていません。

あれから13年経った2014年4月、早稲田から精神的にもっとも遠いところにいる私がなぜか早稲田の専任教員となり、例会会場を早稲田に戻すことにしました。私自身が大失敗を喫した場所で、みなさんとともに再出発をはかれることに大きな喜びを感じています。

特に若い会員のみなさんにお伝えしたいのは、例会発表の失敗くらい、いくらでも取り戻せるということです。私は、2001年4月の失敗の後、29回も学会で発表し、例会運営担当という立場でついに早稲田に戻ってくることができました。

たとえ発表で失敗しても、しばらく落ち込んでいるあいだに、不都合な記憶はデカルトの悪霊が改竄してくれるかもしれません。それからまた研究をはじめればよいのです。実年齢がいくつであれ、それができるうちは、若いと言えるでしょう。

フランス語学とはまったく異なる分野の話ですが、つい最近、東京の有名私大の専任教員という誰もがうらやむ地位にありながら、「校務が忙しい」という奴隷的口実と、「外国に行きたくない」「新しいことに挑戦したくない」という老人的発想から、周囲の懸命な説得に耳を傾けようともせず、国際学会からの招待講演の依頼を断る「研究者」を見ました。引退間近の高齢者ならともかく、この「研究者」は専任教員歴が私と同じ年数しかありません。ほんとうに糾弾されるべき恥は、このように、失敗を恐れて新たな挑戦をやめ、学問の発展の可能性を断ち切ってしまうことです。私としては、これを反面教師とし、一つ一つの小さな研究発表が学問の発展を支えていることを肝に銘じて、引き続きみなさんの発表をサポートしていきたいと思えます。

若い会員のみなさんの、若い挑戦を早稲田大学でお待ちしています。(酒井 智宏)

6. 2014年度例会予定

日本フランス語学会では、毎年4月から12月まで(7月と8月を除く)月一回、原則として土曜日15:00-18:00に例会を開いています。一回の例会では通常二人の方が研究発表を行います。

例会案内はホームページによる他、メーリングリスト frenchling でも流しています。

例会はフランス語学会の会員以外の方でも、自由に来聴することができます。入場も無料です。みなさまのご参加をお待ちしております。

会場: 早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス)
アクセス:

地下鉄東京メトロ 東西線 早稲田駅 徒歩3分
副都心線 西早稲田駅 徒歩12分

JR 山手線/西武新宿線 高田馬場駅 徒歩20分

発表のご希望やその他例会に関するお問い合わせ: 酒井 智宏 (例会運営担当 / 早稲田大学文学学術院) t-sakai@waseda.jp

以下はニューズレター編集段階の4月29日現在の予定です。最新の予定は学会ホームページで

確認してください。

第293回例会 2014年6月21日(土) 15:00-18:00
会場: 早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス) 36号館6階682教室

- (1) 新田 直穂彦 (東北大学大学院) 「題目未定」
- (2) フランス・ドルヌ (青山学院大学)

「Je monte, je valide」

司会: 酒井 智宏 (早稲田大学)

第294回例会 2014年9月27日(土) 15:00-18:00
会場: 早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス) 教室未定

- (1) 石田 寛直 (筑波大学大学院) 「題目未定」
- (2) 発表者未定

司会: 守田 貴弘 (東洋大学)

第295回例会 2014年10月18日(土) 15:00-18:00
会場: 早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス) 教室未定

- (1) 岸本 聖子 (立命館大学) 「題目未定」
- (2) 秋廣 尚恵 (東京外国語大学)

「Corpus driven による文法記述の試み—会話コーパスに現れる理由を表す従属節について—」

司会: 酒井 智宏 (早稲田大学)

第296回例会 2014年11月8日(土) 15:00-18:00
会場: 早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス) 教室未定

- (1) 渡邊 修吾 (獨協大学大学院) 「題目未定」
- (2) 津田 洋子 (京都大学大学院) 「題目未定」

司会: 守田 貴弘 (東洋大学)

第297回例会 2014年12月6日(土) 15:00-18:00
会場: 早稲田大学文学学術院(戸山キャンパス) 教室未定

- (1) 本間 幸代 (国際学院埼玉短期大学非常勤) 「題目未定」
- (2) 発表者未定

司会: 酒井 智宏 (早稲田大学)

7. 2014年度談話会予定

今年の談話会は「有契性か恣意性か - オノマトペと音象徴」というテーマで開催します。なお以下の情報は4月現在のものです。最新の情報は学会のホームページでご確認ください。

開催日時: 7月19日(土) 15時~18時
会場: 明治学院大学 白金校舎 本館3階 1359教室

発表者:

- ・泉邦寿 (上智大学名誉教授) 発表タイトル未定
 - ・篠原和子 (東京農工大学) 発表タイトル (仮) 「音象徴から考える言語の身体性」
 - ・秋田喜美 (大阪大学) 発表タイトル未定
- 司会: 石野好一 (愛知県立大学)

多数の方々のご参加をお待ちしております。
(須藤佳子・田原いずみ)

8. 第2次研究促進プログラムのご案内

日本フランス語学会では、2008年から2010年にかけて実施された第1次研究促進プログラム「ことばを(で)遊ぶ」に続く第2次の研究促進プログラムとして、このたび、「パロールの言語学」と題して研究グループをつくり、研究会を実施するとともに、論集の刊行を目指すこととなりました。以下の趣意をご覧になり、参加ご希望の方は、あとの参加者募集要項にしたがって応募してくださいませう、お願いいたします。

題目: 「パロールの言語学」

趣意: 20世紀を通して、言語体系、構造を探究する「ラングの言語学」がとりわけ進展し、多くの成果をあげてきたことはよく知られている。その一方で、1970年代以降は、「ラングの言語学」においては往々にして夾雑物としてうち捨てられてきた、言説のなかでの言語の実現形態の多様性を重視する研究もなされてきた。また、近年さかんになったステレオタイプ理論やコロケーション研究、さらには認知言語学における用法基盤モデルなどの成果を参照するならば、言語は規則にもとづく推論によってではなく、記憶にもとづく模倣によってなりたっていることが理解できる。すなわち、「ラングがパロールとして実現する」というのは、前後関係としては擬制的な理解であって、使用の経験の蓄積のなかにこそラングが見いだされうる、というのが実情である。いま、「パロール」にとりわけ重点をおく研究をさらに推進する価値はますます高まってきていると考える。より具体的にいうと、以下にあげるような領域の研究がかかわってくると思われる。ただし、下記の研究内容は単なる例示であり、実際にはこのわく組みで多様な研究が可能である。

- 談話分析・テキスト言語学的研究: ディスクール志向の研究, 諸言説ジャンルの研究など
- 会話分析・社会言語学的研究: ポライトネス, 社会的直示, 対話理論にもとづく研究など
- 話しことばの研究: 談話調整辞, プロゾディー, ジェスチャー, 話しことばと書きことばの比較など
- 発話行為にかかわる研究: 発話動詞の研究, 発話操作の痕跡としての諸表現の研究など
- 発話文連鎖の態様とその慣習化にかかわる研究: コロケーション研究, 論証理論, ステレオタイプ理論など
- ラングとパロールの差異と相剋にかかわる研究: 音声学と音韻論, 語用論と意味論のインターフェイスの研究, ソシユール研究など
- 歴史的研究: 新たな言語慣用が規範化する過程の研究など

<参加者募集要項>

研究促進プログラムへの参加希望者は、氏名、所属、連絡先メールアドレスを明記のうえ、研究題目ならびに研究概要を doc または docx 形式で 1000 字以内 (使用言語は日本語またはフランス語) にまとめ、日本フランス語学会事務局 (メールアドレス: belf-bureau@cl.aoyama.ac.jp) に電子メールの添付ファイルで送ってください。受付期間は 2014 年 6 月 1 日から 6 月 30 日 (必着) とします。

応募資格は日本フランス語学会の会員であることですが、現在会員でない方も、プログラムへの参加希望と同時に入会手続きを開始していただければ応募可能です。

応募者には、2014 年 7 月末までに審査結果を通知します。研究テーマが採用された参加者は、2015 年 9 月末までに、フランス語学会例会、研究促進プログラム主催の研究会、または関連する学会・研究会のいずれかで、プログラム内での研究課題について口頭発表をすることが求められます。また、2016 年刊行予定の論集に論文を投稿することができます。論文は査読により掲載の可否が決定されます。

よびかけ人: 川島浩一郎 (福岡大学)
塩田明子 (慶應義塾大学非常勤)
渡邊淳也 (筑波大学)

9. 各地の研究会だより

◆関西フランス語研究会

関西の大学院生と教員が中心になって研究会を開いています。近年は発表が少なく振るわなかったのですが、昨年の12月に大阪大学の早瀬尚子さんと筑波大学の渡邊淳也さんから企画の持ち込みがあり、ミニ・シンポジウムを開催しました。内容もとても良かったのですが、特に第3部の掛け合い形式の発表が今までに見たことのない面白いものでした。強い刺激を受けた我々も関西フランス語研究会の体制の立て直しを図っていかねばとの思いを持った次第です。

この一年の発表は以下の通りです。

12月14日

英仏対照ミニ・シンポジウム「英語の懸垂分詞とフランス語の主語不一致ジェロンディフ」

第1部「英語の懸垂分詞について」（早瀬）

第2部「フランス語の主語不一致ジェロンディフについて」（渡邊）

第3部「英仏対照による事例研究」（早瀬・渡邊）

3月15日

川上夏林「フランス語の心理・感覚動詞再考－心理・感覚の主体とは何か－」

岸本聖子「法助動詞 *devoir* における心理的用法について」

特に学生さんなどにとって人前で発表する機会を少しでも多く持つことは大変有意義なことです。研究を進める上で有用なアイデアやヒントを提供してくれる方々がたくさんいらっしゃいます。これを利用しない手はありません。学会発表されるという場合であっても、その前後にぜひ研究会でも発表して頂ければと思います。学会では時間が限られています。研究会では発表にも議論にも存分に時間をかけることができますので、同じ内容であっても研究会で発表する意味は大きいです。新刊書や論文の紹介、国内外の新しい研究の動向についての紹介や解説なども歓迎します。発表を希望される方は世話人の平塚か大久保までご連絡ください。

案内はメーリングリスト **Frenchling** のみで行っていますが、加入されていない方は世話人までアドレスをお知らせいただければ、個別にメール

でご案内いたします。

平塚徹 : hiratuka@cc.kyoto-su.ac.jp

大久保朝憲 : tomonori@ipeku.kansai-u.ac.jp
(平塚 徹)

◆東京フランス語学研究会

東京フランス語学研究会は、大学院生など、若手を中心としたフランス語学研究者の気楽な研究発表、議論、交流の場です。多くのかたがたに参会していただきやすいよう、フランス語学会の例会がひらかれる日に、同じ(または近接した)会場で、原則として13時から14時30分まで開催します。フランス語学会例会の会場が変更されるときや、編集委員会などと重なるときは開催せず、年間5~6回程度の実施を目安とします。

会員資格、発表資格、会費などの制度は設けませんので、関心のあるかたはどなたでも自由に参会、発表していただけます。発表は、フランス語(学)に関係することであれば、どのようなテーマでもかまいません。また、完成された内容である必要もありません。学会発表の前段階にあたるような習作的な発表や、先行研究に対する論評といった形の発表も歓迎します。

昨年度ニューズレター掲載分以降、今年度4月までは、以下のような内容で研究会が開催されました。

第9回 2013年6月22日(土)

発表者: 松澤水戸(東京外国語大学大学院)

題目: 複合過去と半過去の使い分け — 語彙アスペクトを用いた分類 —

第10回 2013年9月28日(土)

発表者: 小川彩子(関西学院大学大学院)

題目: フランス語における構文の選択 — <Y + verbe>, <X avoir Y qui ...> と <Il y a Y qui ...> の比較を通じて —

第11回 2013年10月19日(土)

発表者: 新田直穂彦(東北大学大学院)

題目: *lui / y* による代名詞化の通時的研究 — *donner* の場合 —

第12回 2013年11月9日(土)

発表者: 曾我祐典(関西学院大学)

題目: 現在・未来の反実仮定と半過去・大過去

の使い分け

第13回 2014年4月19日(土)

発表者： 守田貴弘 (東洋大学)

題目： 空間主義仮説と類型論—Talmy 類型論の現状と射程

4月28日現在、今後の研究会の予定は、つぎのようになっております。

第14回 2014年5月10日(土) 13時から14時30分

会場： 早稲田大学文学学術院 (戸山キャンパス)

39号館5階第5会議室

発表者： 古賀健太郎 (東京外国語大学大学院)

題目： 関係形容詞の欠如を名詞が補完する可能性について

第15回 2014年6月21日(土) 13時から14時30分

会場： 早稲田大学文学学術院 (戸山キャンパス)

36号館6階682教室

発表者： 石田寛直 (筑波大学大学院)

題目： 未定

第16回 2014年9月27日(土) 13時から14時30分 会場・発表者未定

第17回 2014年10月18日(土) 13時から14時30分 会場・発表者未定

第18回 2014年11月8日(土) 13時から14時30分 会場・発表者未定

発表を希望なさるかたは、下記ホームページの「お問い合わせ」の項目から世話人あてにご連絡ください。最新の予定については、ホームページの「今年度の研究会」の項目でご確認ください。ホームページ上で発表者が未定になっている回については、発表者を募集しております。

東京フランス語学研究会ホームページ：

<http://lftky.jimdo.com/>

(渡邊淳也・塩田明子)

10. メーリングリスト frenchling から移行 その他のお知らせ

frenchling はフランス語学関係の情報交換を目的としたメーリングリストです。フランス語学関係の研究会や講演会といった催事の告知、文献の探索、あるいはフランス語そのものについての質問、疑問、そして議論に活用してください。利用にあたってはいくつかの注意を守っていただきたいのですが、当メーリングリストはフランス語学会と密接な関係にあります。フランス語学会を含め、特定の学会員だけを対象とした連絡には使用しないでください。逆に学会員以外にも開かれたオープンな会合や呼びかけにはどんどん利用してください。ただし、特定の政治的メッセージを含むもの、営利的な活動、アルバイト募集等の研究・教育と関係のないアナウンスなどはご遠慮ください。フランス語関係の教員の募集に関する情報は流していただいて問題ありません。

さて、皆さんもご存じのように、frenchling が利用していました Yahoo グループのサービスがこの5月に終了します。それにともない管理グループで検討の結果、いくつかの可能性の中から無料でなおかつ広告などがうるさくないということで、Google グループに移行することになりました。この記事を書いている今現在、管理グループの井元さんが作業をしてくださっており、このニュースレターがお手元に届く頃には、無事移行が完了して、メンバーの皆さんにもメールでお知らせがすんでいるはず。移行後の新しい frenchling は g-frenchling@googlegroups.com というアドレスになります。移行からしばらくはメールが2重に届く可能性があります。そのような事態もこのニュースレターが届く頃には解消されているはず。管理グループのアドレスも変わりました。正式の移行の際にメールでもお知らせする予定ですが、新規の登録、アドレス変更、あるいは退会の時には直接、新しい管理グループのアドレスまでご連絡ください。メンバー以外の方に登録を勧められる場合も、新しい管理グループのアドレスをお伝えください。新しい管理グループのアドレスは以下の通りです：

g-frenchlingowners@googlegroups.com

それでは新しいシリーズになる frenchling をどうぞご利用ください。

(frenchling 管理グループ)

1 1. 2013 年度収支決算報告 (*)

(単位 円)

収入の部	
会費	726,000
機関誌売上金	91,000
広告収入	98,000
預金利息	565
その他雑収入	0
小計	915,565
前年度繰越金	3,686,704
計	4,602,269

支出の部

BELF47 号印刷代金	310,065
BELF48 号編集実費	20,000
ニューズレター印刷代金	18,816
発送費・通信費	76,563
特別発表(講演)謝礼	180,000
人件費	163,988
会場費	12,000
事務消耗品費	16,527
振込手数料	20,880
ホームページ管理費	7,430
雑費	10,000
小計	836,269
次年度繰越金	3,766,000
計	4,602,269

次年度繰越金の内訳は以下のとおり

銀行預金 (三井住友銀行普通預金)	455,393
郵便貯金 (普通)	288,716
(振替)	952,808
銀行預金 (三井住友銀行定期預金)	2,006,412
現金	62,671
計	3,766,000

(*) 2014 年 3 月 31 日現在の収支決算報告. 5 月に開催される編集委員会で会計報告と監査報告がなされ, 審議のうえ承認の手続きがとられる.

〒 150-8366
東京都渋谷区渋谷 4-4-25
青山学院大学フランス文学科合同研究室内
日本フランス語学会

1 2. 編集後記

例会や研究会で, 自発的に発表を希望して下さる方が少ない状況です. これは必ずしも今にはじまったことではなく, むしろ旧態をとどめているといったほうがよいかもしれません. しかし, 昨今のきびしい競争のなかでもなお自発的な発表希望者が少ないことには, 危機感をいだかずにはいられません. ほかの学会では, 発表希望者に概要を提出させ, 査読でふるい落としているところもあるというのに, われわれの学会では, 運営側が発表者の掘り起こしに腐心しているという現状があります. 研究者としての自己の存亡をかけなければならないはずの若手(大学院生をふくむ)が, 打診をうけてからようやく重い腰をあげるのは, 考えてみればおかしなことです. もちろん, だれにでも, そのときどきで直面している困難はあるでしょう. しかし, 「よほど余裕のあるときだけ, 機会をえらんで舞台に立つ」という態度では, 当人だけでなく, フランス語学界全体の衰退しか展望できなくなります. いまや, 謙遜はまったく美德ではありません. 「若い」(実年齢ではなく, 精神のありようのことを言っているつもりです)ということ, なによりもまず精力的に研究し, 発表し, 論文を書くということではないでしょうか. 成否は行動したあとではじめてわかるのですから, まずは行動を, と訴えたいと思います.

.....と, 以上のような編集後記を4月中旬に準備していたのですが, その後一転して, 例会での発表の希望が多く出されるようになり, 順調に空席が埋まってまいりました. おそらく, 今年度一杯はあまり心配のない状況になりつつあると思います(ただし, 5月例会については, 通知を配信する時期になってもなお空席があり, さすがに間にあわないようでしたので, その空席を埋めるためにわたしが発表を志願しました). 今後も研究活動が活発なフランス語学会であってほしいものです.

(渡邊淳也)

♪ ニューズレターのバックナンバーは, 日本フランス語学会のホームページで読むことができます.

<http://www.sjlf.org/>